

支持的風土を基盤とした「考え議論する道徳授業」

道徳が特別の教科として位置付けられました。各校において、ICT 端末の活用を含めた道徳授業の実践が日々積み重ねられていることと思います。

以下は、「信頼、友情」の内容項目を扱った、5年生の道徳授業の様子です。

「本当の友情とは」という主題名で、教材の登場人物の行動の可否について、話し合いが行われていました。大多数の児童が登場人物の行動に反対する中で、Aさんは賛成の立場を取ります。ただ、Aさんはその理由をうまく説明することができません。そんな折、周囲の児童から、「それってこういうことじゃない？」とAさんの考えを分かろうとするつぶやきが聞こえてきました。担任の先生や周囲の児童が、少数派のAさんの考えにしっかりと耳を傾けたことで、Aさんは周囲に助けを借りながら、「登場人物の気持ちが僕には分かるから仕方がないと思う」と発言をすることができました。すると徐々に、Aさんの考えを聞いて、考えが変容する児童が現れてきたのです。その後、学級全体でAさんの考えに対して、「確かにそうかもしれない」という共通理解が図られ、「ではあなたならどうしますか」という主題に迫る問題解決的な学習へと展開していきました。

たとえ少数派ながら、それでもAさんが最後まで自分の考えを述べることはできたのは、担任の先生の優れた授業力はもちろんのこと、何より周囲の児童の「傾聴・受容」の力が育っていることにほかなりません。

「傾聴・受容」は、信頼関係の構築や対話的な学習の基礎基本となり、学校や学級で育むことで、次の効果が期待されます。

- 話を聴き合う授業をとおして、より人間関係が育まれていく。
- 聴き手の態度、反応が磨かれていくことで対話の質が上がる。
- 優れた聞き手によって、話し手が育つ。

さらに、この学級では、児童間の「支援」の関係が育まれています。

- 多くの友達の考えとは異なる立場に立って、自分の考えを述べるができる。
- 友達の立場や気持ちに応じ、友達の考えから自分の考えを見直そうとしている。
- 個を大切にしながらも、みんなで成長しようとする姿勢がうかがえる。

予測困難な未来を生きる児童生徒には、これまで以上に、グローバル化の進展による歴史的、文化的な背景を異にする人々と対話し協働していく力が必要となります。そのような社会の中では、主体的に考え判断する力や高い倫理観をもち、時に意見や考えが衝突したとしても、よりよい方向を目指していこうとする資質・能力が求められます。そのためには「傾聴・受容」「支援」を含め支持的風土を基盤とした、「考え議論する道徳」の授業実践を積み重ねていくことが大切です。